

第34回日本気象学会夏期特別セミナー (気象若手夏の学校) 開催報告

第34回日本気象学会夏の学校実行委員会
(松山裕矢*・喜多川太一*・吉田尚起*ほか)

1. はじめに

第34回日本気象学会夏期特別セミナー(以下、夏の学校)が2022年9月9日(金)から11日(日)にかけて九州大学が主幹校となって開催されました。本セミナーは学生および若手研究者の交流の場として毎年開催されており、34回目の開催となる今回は164名(社会人11名、博士課程22名、修士課程92名、学士課程39名)の方々にご参加いただきました。

近年は新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインでの開催でしたが、今回は学会形式で現地開催を行うことができました。4名の講師による招待講演および多くの参加者による一般講演、そしてレクリエーションで現地開催ならではの盛り上がりが見られ、参加者同士の交流が深まる機会となりました(第1図)。

2. 招待講演

大学で研究されている方2名に90分ずつ、官民で気象に関係するお仕事をされている方2名に60分ずつ、ご講演いただきました。夏の学校でしか聞くことのできないような貴重なお話ばかりで、大盛況でした。講演内容は以下の通りです。

江口菜穂氏(九州大学応用力学研究所大気海洋環境研究センター大気環境科学分野准教授)
「とある大気科学者を取り巻く環境の変化とその応答について」

江口准教授からは、ご自身のキャリアパスと現在の研究内容についてご講演いただきました。結婚や育児、家事と研究の両立などについて、人生の先輩とし

ての情報をたくさんご提供いただき、参加した学生が将来や人生について考えるきっかけを与えてくださいました。研究についてのお話では、成層圏について熱く語っていただきました。

伊藤耕介氏(琉球大学理学部物質地球科学科地学系准教授)

「いち台風研究者の喜怒哀楽」

伊藤准教授からは、キャリアパスと研究内容の変遷、そして現在の研究内容についてご講演をいただきました。ご誕生されてから現在まで、研究のことからプライベートなことまで、広く深く様々なエピソードをお話ししてくださいました。特に、今までの研究遍歴の中で関わった方々とお話で、コミュニティを広げることの重要性を学ぶことができました。

鈴木健斗氏(気象庁大阪管区気象台気象防災部予報課)
中村友祐氏(オフィス気象キャスター株式会社／ウェザーニューズ)



第1図 1日目の集合写真。

* 九州大学理学府地球惑星科学専攻。

第1表 2日目の一般講演のタイムテーブル.

日時	A 会議室	B 会議室	C 会議室	D 会議室
9:00~10:30	熱帯大気①(6件)	中高緯度大気(6件)	大気境界層(6件)	観測手法(6件)
10:30~12:30	熱帯大気②(8件)	雲物理(8件)	物質循環システム(8件)	降水システム①(8件)
14:00~15:45	熱帯大気③(7件)	大気力学(7件)	気候システム①(7件)	降水システム②(7件)
15:45~18:00	気象予報(9件)	大気力学・中層大気(8件)	気候システム②(9件)	降水システム③(9件)

「若手から見た気象の官民」

鈴木氏からは気象庁について、中村氏には民間会社で働くことについて、就職先を選んだ理由、現在の仕事内容、学生時代に学んだことで今活きていること等をお話ししていただきました。お二方の年齢が参加している学生に非常に近いので、参加している学生はこれからの進路決定に対して有用な情報を得られたようです。

3. 一般講演

本セミナーの2日目には発表を希望した119名の参加者による一般講演が口頭発表の形式で行われました。4つの会議室を借りてセッションに分かれて行い(第1表)、発表時間は質疑込みで1人あたり15分としました。発表内容は各講演者の自由とし、中には印象に残るような自己紹介を行った方もいました。久しぶりの現地開催の一般講演で、発表も質疑も大盛り上がりでした。

開催後のアンケートでは大きく2点のご指摘をいただきました。1点目は、休憩時間がないなど、スケジュールに余裕がなかったことです。これは、参加者数が予想を遥かに超えたことが原因でした。次回以降

も講演者数が多いようであれば、口頭発表だけでなく、ポスター発表を導入してもいいのではないかと、いう意見もありました。2点目は、発表後などに講演内容についてゆっくり語り合う時間がなかったことです。今回は貸会議室での開催で時間に制約があったため、そのような時間を設けることができませんでした。本来の予定であった合宿形式での開催であれば、一つ屋根の下で活動を行うので、そのような時間が確保できると考えます。

4. 終わりに

夏の学校に参加いただいた皆様、招待講演を快く引き受けてくださった講演者の方々に、深く感謝申し上げます。さらに、日本気象学会からの資金援助とご理解のおかげで、久しぶりに夏の学校を現地開催することができました。厚く御礼申し上げます。そして、運営スタッフの皆さんの尽力のおかげで、良いイベント、良い思い出となりました。お疲れ様でした。次回第35回夏の学校は、東京大学が主幹となり開催される予定です。充実したセミナーになることを願うと共に、それを通して学生・若手研究者間の交流がさらに活発になることを期待しております。